

## 知らない誰かのために

## 都立白鷗高等学校附属中学校3年 田村 柚乃

高校生活の中の1年間、私は東京都教育委員会が主催する留学プログラムに参加する予定だ。私は最初その事が決まった時、うれしさとドキドキと、少しの不安で胸が高鳴っていた。しかし、ふと思ったのだ。1年間という長い期間の留学では、とてもたくさんのお金がかかるだろう。我が家には、そんな大金があるのだろうか。私のために、そんなに払えるのだろうか、と。しかし、留学説明会での話や、母から聞いた話で私は納得した。

とても多くのお金がかかるのは事実だが、かなりの部分を東京都の税金でまかなってもらえるのだそうだ。「東京都の税金」というのは、都民が払っている税金である。だから、もちろん父や母も払っているし、友達の家でも、学校の先生も、私のことを知らない誰かも、払っている。それを考えた時、多くの人のお金で私は学びに行くのだという、大きな責任のようなものを感じた。私が背負う責任。知らない誰かから未来を託されたような変な感覚だ。そして同時に、税金というものに助けられていたことに気がついたのだ。税金という仕組みがなかったら、きっと留学できなかっただろう。そもそも留学プログラムなんてなかったのかもしれない。そう思うと、本当に税金はありがたいものだと感じた。

この体験をして、今まであまり目を向けず、気がつかなかったことに気がついた。それは、「国民ひとりひとりが税金によっ

て助けられている」ということ。生活保護を受けることもできる。病気になれば、病院代が安くなるし、私のために勉強のためのお金ももらうことができる。消防車、救急車、パトカーも税金で動いているし、道路や信号、校舎も先生も水道も全てが税金なのだ。そう考えると、本当に命自体が、生活自体が税金に支えられていると実感してくる。私は今、この作文を書きながら、こう思っている。「私が生きてきた世界には、こんなにあたたかい仕組み、素晴らしい税という仕組みがあったのだな。」と。大げさかもしれない。しかし、税金の役割というのは、“糸”なのだと思います。全く知らない誰かが、全く知らない誰かの家で燃えている火を消す消防車を走らせている。全く知らない誰かが、全く知らない誰かの落とした財布を探してくれるおまわりさんにお給料を払っている。全く知らない誰かが、全く知らない誰かが車でひかれなかったための信号をつくるお金を、学校で使う教科書をつくるお金を、留学するためのお金を、払っている。誰かが、全く知らない誰かを、助ける。税金は、その人と人とを結ぶ“糸”なのだ。このような仕組みがある社会、私はとってもあたたかいと思う。そして、大人になって仕事をして、お金が得られるようになったら、多くの種類の税金を払うことになるだろう。その時は、嫌がらずにずっと払い続けようと思う。知らない誰かのために。